
翔の物語 ~未来を生きるぼくら~

海山ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翔の物語～未来を生きるぼく～

【Zマーク】

Z2760Z

【作者名】

海山ヒロ

【あらすじ】

今日も、海をみつめる。四方からふきつける潮風が身体をうつ。眼下には、一面にひろがる大海原。

どこまでも、どこまでも見晴るかすかぎり、紺碧の水面がつづいてい

少年は、眼下の岩肌をそつと見やり、うめくよつて呼んだ。

「……今日もだ」

ひとや物をすべてのみ込みながら、押し寄せる海。
生まれる前の出来ごとのおかげで、自分が死ぬ運命を背負わされた
ら。

あなたならどうしますか？

プロローグ（前書き）

これまたブログからの転載です。少々長めのものがたり。しばしう付き合いください。

プロローグ

今日も、海をみつめる。四方からぶきつける潮風が身体をつづつ。
眼下には、一面にひろがる大海原。
どこまでも、どこまでも見晴るかすかぎり、紺碧の水面がつづいて
い。

「…………今日もだ」

少年は、眼下の岩肌をそつと見やり、うめくよつと呟ついた。
彼はいま、そこだけ海にせりだした、かつて清水の舞台と呼ばれて
いた場所に立つている。

釘を一本も使わずに組み上げられたその見事な木の舞台は、床を支
える柱組みの土台のすぐ下の崖まで波にあらわれ、その上の土台の
石や柱さえも、ともすれば押し寄せる海にのみこまれそうだった。
舞台をぐるりとめぐる、といろどり崩れかけた手すりから身をの
りだしていた少年の田は、柱組みのすぐ下に植わっている、くれな
い色の葉がしげる紅葉の下の海面に、釘付けになっていた。
紅の葉はひらめき、よせてはかえす波により、はらつ、はらつと海
面へ散つていく。

「昨日は…………」

少年は、あとをつづけることが出来なかつた。

昨日の朝彼がにらみつけた海面は、もつすこじ下だつた。

すこじづく、すこじづく。

少年は毎朝じつやつとこの舞台から海を「見張つて」こる。

あじがわ、あじがわ。けれど確実に。

毎朝見るたびに、海面は上昇している。
昨日はあの紅葉の木の下の坂まで、だった。
その前はそのままの坂の下。

少年が彼の父親からこの田畠を受け継いだ頃よりも、海面の上昇する速度は速まっている気がする。
いや。確実にはやまっている。

父のかたい、大きな手にひかれてこの舞台に初めてのぼった日よりも、何倍も速い。

忍び寄る、海。

少年は、せめぐれの海をにらみつけたまま、ゆっくりとあとずさる。

じつじつ、じつじつ。

田舎にこじだきながら、一気に海は震いかつてくれる。
彼は舞台の端までやさりながら、ゆっくりと海に近づいた。

駆け出しがくなるのを、ぐつぐつしながら。

滅びの条件

地球が養えるヒトの数はどれくらいだらう？

「養える」とは、飢えないと言つだけで、なにもしないで安穩と暮らし、ふくふく太れるということではない。治水、耕作などの労働をして、そこにたずさわる一人一人が、まあ飢えずに生きていける。それは何人だろう？

もちろんその条件には、現在この星に生息するヒト以外の生き物をこれ以上死滅させることなしにという、項目が入る。飼育されている豚や鳥や牛や羊は喰う為のものだから、死滅させることはないとつけけれど。

さあ何人だ？ 答えはでた？

現在地球上にいるとされる66億人が、すでに多すぎることはもうわかっている。

でも。

「じゃあいまの半分くらいで」。

急にそう言われても、お互い以外天敵のいないヒトだから、戦争か、ヒトラーがしたような大量虐殺、はたまた新型ウイルスの大流

行、パンデミックでもなければ、減らない。

以前はやつたアニメのよう、「人類補完計画」がどこかで進んでいたとしても、それを凌駕する、ちゃぶ台をひっくりかえすような何かを、地球さんは抱えているかもしれないけれどね。

彼女、ガイア、地母神。

まあ呼び名なんて気にしてないだろうからなんでもいいけど、この1個のだ円形の惑星という生命体からすれば、ヒトといつ種はエラーだ。ヒトにとつてのウイルスや癌と変わりないだろ。

そこにそのエラーであるヒトが創りだした「神」のはいりこむ余地などなく、地球とよばれる生命体がそのエラーを修正しあげれば、ヒトは滅びる運命にある。

何故つて？

いくり危愛精神（博愛は同胞への愛であつて、すべての他者にたいする愛ではないよ？）の持ち主でも、癌にだつて生きる権利があるのだと、己の身体を内側から喰いつくとする異物を放置することはないだろうから。

癌に侵されれば、薬なり手術なりでそれを排除しようとする。

そして、排除されたモノは死ぬ。あたりまえだ。

それはいつか起こりうるかもしだれないが、いまではない。

たぶんヒトは、どこかでそう思い込んでいる。地球という名の患者が冷たいビニールシートとスチールでできたストレッチャーに横たわり、まぬけな青色の手術着を着せられ、麻酔を打たれて運ばれていっているなどとは誰も考えない。その身体を切り裂き、病巣であるヒトを切除せんとするメスの、にぶい光があたっているかもしだれない、とは。

でももしさうなったとしたら？

ジヨラ紀から白亜紀、約一億五千万年のあいだこの地球上をのし歩いていたとされる巨大な生き物は、自分達が滅亡するその瞬間までそれを知ることも、ヒトのよつに勝手に想像して騒ぐこともなく、その日を迎えることができた。

でも。ヒトという種が、この星の環境を変えるほど大をなせた要因である想像力という恩恵は、我々にそれをもたらす。

恐怖を。

「なにしてるんだい？」

守は、自分より頭ひとつぶん小さい人の影に、そつと声をかけた。

杉や桧がうつむつと生い茂る森の、そこだけ切り取られた広間のような空間。そこにたたずむその人影は、古びた、けれど良く手入れされた刃物を、これまた古びた革と思われる袋からとりだした。守の声が届かなかつたのか、目の前の杉の木立をじつと見上げなにか呟いたあと、おもむろに刃物をふるつた。

「やめたまえ！」

守はとつとつとそう叫ぶと、手をかざしていた。
鈍色にひかる刃と、杉の枝との間に。それを守るよつとして。

その人影 まだ頬にまるみの残る 少年が素早く反応していかなければ、彼の整つた白い手はまつぶたつになつていただろう。もちろんいくら少年の反射神経がすぐれていたとしても、うす皮一枚手前でぴたりと止める、などというわけにはいかなかつたけれど。

「ばつかやううーなに考えてんだ！」

腹立たしげに罵声をあびせ、少年は刃物をあげた。

守はほうけたように自分の手をみつめる。少年がふりおろした刃は、ほんの少しではあるが彼の手に食い込んでいた。

手のひらのちょうど真ん中に一筋の切れ込みができていた。その切れ込み、皮膚と皮膚の間から赤い血が浮かび上がり、みるみるあふれだすと手首を伝つて守のクリーム色のシャツの袖を赤く染めた。少年がもつ刃物の刃にもその血はしつかりついており、刃から柄を握る少年の手へひとすじ、赤い筋が伝つた。

少年は刃物を脇に放ると、腰にさげた布で守がおもわず声をあげるほどきつく、血の伝う手首を縛つた。つぎに腕をたかくあげさせ、おなじく腰にさげた手縫いと思われる袋から、乾燥したなにかの葉を数枚とりだと、口にふくんだ。

「まつたくなに考えてんだ……急に出てきて人の邪魔ばっかりしやがつて」

そうぶつぶつ咳きながら葉をかみ碎き、じぱらくしてからそれを守の、鮮血にじむ傷口にふきつけた。

「イッ……！」

ぼうっとされるままになつてていた守だが、突然襲つてきた刺すような痛みにうめき声をあげ、反射的につかまれている手を引き抜こうとした。その間にも、胸の鼓動にあわせるように、熱い痛みが胸から腕へと走つてゆく。

「じつとじつうー。」

すかさず少年の叱責がとんだ。

痛みにふるえる守の手首をぐつとつかみ、もう片方の手で自分の服の裾を割いて即席の包帯をつくると、吹きつけた止めの薬草がすれないように、きつちつ巻いていく。

「まつたく……布も貴重品だつてのに……切られりや痛いのは当たり前じゃないか」

布の片端を器用にふたつに裂き、かた結びする。その間に少年は、眉間にしわをよせて眩いでいる。

「終わつたぞ」

自分の仕事の出来を確認するよつて守の手をためつすがめつする

と、急に興味を失ったのか、その手をはなして背をむけた。

かたわらに放つたままだつた刃物

後で守がしつこく尋ね、

それは鉈と呼ばれるものだとわかつた

を拾い上げると、乾き

かけていた血を木の下草で丁寧にぬぐつ。

痛みに顔をしかめながら、守は手際よく治療された自分の手をしげしげと見つめ、

「ありがとつ」

微笑んで彼にその手をあげてみせたが、とたんに痛みにつめいてしまつた。

「あんた……ほんとに馬鹿なのか？」

首だけ振り向いた少年が、呆れたようにきこえてくる。

「いや…………子供の頃以来、こんなケガをしたことがなかつたから
…………」

守の答えに、少年の、まだ柔らかい線を描く頬がゆがんだ。

「オカ喬ちのおぼつかやまならうだうづな。汗もかかなきや血も
流さない。嫌なことはみんな下々のものがやつてくれるつてわけだ」

昨日あつたばかりの、十以上は年下と思われる少年から容赦なく
ぶつけられる言葉のつぶてに、感いながら、それでも守は苦笑して
みせた。

「こやかにじやなくて。そもそも『切る』ことがないんだ」

身体もむきなおつて不審げに眉をひそめる少年に、守はよりわか
りやすく囁つこととした。

「刃物がないんだ」

「はあ？」

守の家、といつよりも、少年が「オカ」呼んだ都市の一般的な家
庭に、刃物はない。

陸の大部分が海のそこにある沈んだあの田からしづらへたつて、オカ
と呼ばれるようになる陸地の、地表から数十メートル、ところによ
つては百メートル以上地下に建設された居住区では、おのれの身体

以外のすべてが配給物となつた。

水や食料はもとより、ハサミや包丁などの金属は、原料をもはや採掘できなくなつたため、金より貴重になつた。

ハサミなどの刃物を使いたい場合は、公共の場所においてあるものをその都度、その場で使う。個人で所有する場合は許可が必要で、まず最寄の役所に申請書を提出し、政府機関の討議をへてめでたく許可がおりて配給されるのを、ただひたすら待つしかないと言つた状況だ。

もつとも、オカでは、個別の申請がだされることはほとんどなかつた。切る機会もものも、ないからだ。

たとえば調理。あの日までは各家庭で、レストランの厨房で多種多様の包丁が毎日使われていた。いまは調理を必要とする本物の肉や野菜は月に数度の配給しかなく、それも守たちのよつな、オカでも地上近くの層で暮らすひとびとにしかまわつてこない。配給のない日や下の層で暮らす人々は、調理済みの食品や合成栄養補助食、配給きつぷで食べられるレストランを利用するか、栄養力セルでしのいでいる。

あの日を生き抜いた人々は、耕作地のほとんどが海に沈み、地下工場で食料が生産されている現状では、飢えないだけましだと思つている。

しかし、あれから半世紀以上たつた。

食糧事情の急激な悪化は、数々の内臓疾患やあごの筋力低下をも

たらした。せり、せり、身体面だけではなく、あの日以前にひとびとが謳歌していた食の楽しみが失われたことは、なによりも心に影響をおよぼさずにはいられなかつた。

食料に金属製品はいうまでもなく、紙やプラスチックなども、めつたにお田にかかりなくなつてしまつて、どのくらいたつたろう。守たち第3世代になると、あの日以前にはどこかの子供でも箱一杯に持つていた、いろんな素材でつくられたおもちゃを所有している子など、いなかつた。遊ぶときにはそれぞれの年代で割り当てられた体育場で貸し出されるものを、使つのである。

守が今回の旅に持つてきた金属製品は、「サカイ」にはないだろうからと特別に支給された、爪切りとひげそり用の安全カミソリだけ。そしてオカで使われているそのカミソリには肌を氣づつけないようガードがついているから、怪我なぞするはずもない。

だから守は知らなかつた。

肉に刃物が喰い込むあの奇妙な感触を。

ぱっくり裂けた傷口から、子供のころ体育場で転んでできた擦り傷とはあきらかに違ひそこから、鮮やかな赤い血が鼓動にあわせてふきだすさまを。

血が空氣にふれた時の、むびのような匂いを。

サカイで生きる、いま田の前に立ち、こちらを睨む少年にはおなじみだらう。それらもうもうが一気に押し寄せ守を圧倒した。

「そりか……。刃物で切ると、こんなに痛いのか……」

包帯の上からそつと傷をむくる守に、付き合にきれないと言つた表情で肩をすくめると、少年は踵をかえして行ひつとした。

「あ、翔くん」

「まだ何かあるのかよ」

ふりむきもせず、歩調すらゆるめずに聞き返していく。
いきおい守は追いかける格好になつた。

「…………知らないのかな？あ、君は翔くん、だつたよね？」

確認しながらさしだした笑顔はかえされることもなく。
守は言いかけた言葉をつづけた。

「木を、たとえ小枝一本であつても切れば、逮捕されるんだよ。そして捕まれば、収容所にいれられてしまうんだ。…………たとえ子供でも」

「俺たちは捕まらない」

ぴたりと足を止めて、前を見据えたまま少年 翔は、守がためらいがちに付け加えた「子供」という言葉にかぶせるように、そう言い放つた。

「…………たしかに、ここには政府の役人が、僕以外の人間が来ることはないさそうだけれど…………」

となりで足を止め、そつに鬱蒼としたまわりの木立を見回す

守に、翔は冷たい一瞥をあたえ、

「俺たちはいない人間だから。だから捕まらない」

まるで幼い子供に説明するよつて、ゆつくつとそつと語った。

「……どつこつとだい？」

不思議そうに小首をかしげる守に、翔の頬がまたゆがんだ。

「あんた本当ににぶいな。ここはな、無人のはずなんだよ。ここにはヒトなんて、住んでないはずなんだ。あんた達オ力の人間の撃では。

じいちゃんが若い頃、ある日いきなりオカの人間がやつてきて、『ここは危険区域に指定されたのに、直ちに立ち退いてください』それだけ言って、立て札立てて、帰つてつた。『危険だから』『決まつたから』。それだけ。ほかになんの説明もなし。それからじばらくたつて、あの壁ができた

そこで言葉をきつて、守たちが今いる清水山からも遠望できる音羽山の山腹にある壁を、かつて海面から200メートルはあつた地点にそつて建設された防波壁を、翔はにらみつけた。

「ほかにどこに行かつてんだ？ オカとこの間にはあのでつかい壁があつて、キヨカシヨウがなきや入れない。俺たちはそんなもん持つてない。俺たちはここで生まれて、ここでずっと生きてきたんだ。他に行くところなんてない」

守は、返す言葉もなかつた。

産まれてからずっと、オカの街で暮らしていた。政府高官の家で一人息子として、この世界で望めるかぎり何不自由なく。

決められた学校に通い、ここに来るまで、外気に触れるのは一日一回の日光浴と、月に一度、地表にでるときだけ。あの日以前の半分ほどの面積になった日本各地に点在する他のオカにもいまのところは召喚されていないので、行つたことはない。

海洋生物学者となつてから、念願かなつてようやく今回、このサカイの村に調査官として訪れるまで、人々がどんな思いで暮らしているかなど、考えたこともなかつたのだ。

「『じめん……。僕は……なにも知らなかつた……』

自分の無知と、それゆえの無神経にもみえただろう行動がひたすら恥ずかしくなり、守は身体をふたつにあるほど深々と頭をさげた。頭の上で、翔がだしたと思われる、ふんっという音がした。

「知つてるか？あなたの『シウカワジヨ』がどこにあるのか？」

守が顔をあげると、翔の片頬はまたゆがんでいた。

先ほどから彼がみせるその表情は、14歳の少年にはすこしも似合わないはずだった。少なくとも、オカでそんな笑い方をするその年頃の子に、守はかつての自分をふくめて会つた記憶がない。

けれどもサカイに棲むこの少年には、わざと悪ぶつている力みも見られず、その表情が板についていて、守はなぜか哀しくなつた。

「ここから3キロばかり、山伝いに南におりると、島が4つ見える。昔は山だったらしい。その中で一番大きいのが大岩島で、そこがシユウヨウジヨだ。昔山だったって言つてもそんなに高くなかつたらしい。一番高いところでも、海面から100メートルもなかつたつてじいちゃんが言つてた。

そんな低い山で、四方を海に囲まれて。どんな気がするんだろう

な

守が放り投げれたその言葉になにも言えないでいるうちに、翔はすたすたと行つてしまつた。

庄介（後書き）

Boy meets Boy.

ヒト以前、の楽園

「管理社会は真社会性社会とも言える。つまり、アリやハチのようない、その社会で必要な生殖、食料調達、子供の養育、敵から群れを守るというような幾種類かの役割を分担する。

オカでは分担の割り振りは、ゲノムによって決められるかわりに、コンピューターを使って計算してはじきだすわけだ。そして、ひとびとは一度決められた役割からはずれることはない。

生き残るために

「気候の分野では、実験室において研究を行うことにより、新しい現象を調査することはなかなかできない。誰も、温室効果ガスの濃度を変化させたり、海水の量を増加させたりして、地球の気候システムを部屋の中にもちこんで実験はできない。

地球には現在、たったひとつ気候システムしかも、我々ヒトは二酸化炭素やメタン、フロンを排出することでそれを汚染し、制御不能の実験を行っているとも言えるな」

海がせまり、遺されたわずかな大陸　かつて山だった場所　に、ヒトは住んでいる。

山には本来、平らな土地などない。

だから「あの日」とそれにつづく気候変動の嵐がふきあれた一か月半を生き抜いた第一世代のひとびとは、山の頂上を切り開き、海

に沈んだ彼らの街を再建しようとした。

しかし木は、貴重品である。

海面上昇の原因のひとつとされる温室効果ガス、二酸化炭素の排出量をおさえ、海面上昇を食い止めるために。

あわよくば大気中の二酸化炭素濃度を低くし、海面をあの日以前の場所に後退させられるかも、いつかは「元通り」になるかもと淡い期待をかけて、残った陸地を木々で埋め、海面ちかくでは、葦などが群生する沼沢地が形成された。

現在縁でおおわれていなのは、地下の街に電力を供給するための風力発電塔と、空気の循環をつながすための通風口。それから現在の海面からもはるか高みにあり森林限界をこえる山だけである。

ヒトが文明をもつ以前の状態にもどったそれらの楽園では、ヒト以外での日を生き延びたものたち もう高層ビルのガラスに向かう感覚を狂わされ過労死することもなくなった渡り鳥。美食家や壁飾りを求めるか、ヒーローになりたがるハンターに狩られることもなくなった鹿。野生化した元ペットの犬や猫、その他無数の動物達が闊歩していた。

オカの青年 サカイの少年

守の世界であるオカでは、いくつもの決まりがある。

まずひとつ目。身体と、とくにこころの健康を維持するため、月に一度、通風孔を通りて地上にぐること。

ふたつ目。その際、自由に歩き回ったりしてはいけない。また、草木一本、木の葉一枚でも持ち帰ってはいけない。

三つ目。「不用意に」持ち帰ることを避けるため、地下に戻る際には、ブラシで衣服および靴の裏、毛髪まで徹底して払つておくこと。

「自然」に戻った昆虫や動物の俊敏さに、地下生活でなまつたヒトが追いつけるわけはないので実際には難しいだろうが、もしされらを捕獲し、保有していれば、収容所送りとされた。

人々が暮らす地下の街にも、汚水処理やストレス緩和のために草木は植えられているが、それとて政府の厳重な管理下に置かれ、特別許可証を携帯した研究者や管理者以外が切ろうものなら、やはり収容所送りとなつた。

きまりはそれだけではない。

陸地の大部分が海に沈んだとき、ヒトがつくつた幾多の建造物もともに沈んだ。電化製品や家具、その他持ち運ぶことができなかつたすべての便利な道具とともに。

残された土地にしがみつくだけの人々に確かめるすべがないが、それらは今頃海水と潮流にさらされ、金属製品はさび、コンクリートの建物はそのため崩れていことだろう。

木造のものは海中をゆうゆうと泳ぐ生き物たちがかじり、分解して、もうほとんど形をとじめていかないかもしない。

いつまでもそのままの形でいるのは、微生物でも分解できないプラスチック製品とステンレス。それらは海のもくずとしていつまでもゆらゆら、ゆらゆらとあてどなく漂っているだらうけれど。

それまで物質文明を支えてきた地球の一部、セメント、ボーキサイト、レアメタル、原油、大量の砂などの採掘場ももちろん、海の底に沈んだ。

あの日までなら、はやいものなら数年、いやいやトレンドが変わつたから、ただ飽きたからという理由で使い捨てていたものを、ヒトは大事に使はなくなつた。身の回りのものほぼすべて。かるうじて持つて逃げることができた衣類、医療用具、文房具。家や家具など足りないものは一から作り直し、共有する。布にほころびができる、繕い、食器がかければつきをあてた。

かわりなど、もつないのだから。

海面が上昇しつづけていることが調査により確定した第2世代からは、ヒトは地下にもぐり、水や食料をふくむすべてを配給制にかえた。ものを惜しむ、大切にするという行為は、生き残るうえで必須となつた。

翔たちの村、サカイでも状況は変わらない。

が。彼らは政府に管理されているわけではない。

オカの生活に耐え切れず逃げてきたもの。最初から加わらなかつたものなどが寄り集まつて群れを形成し、さらにそれが集まつて村をつくり、もう幾世代が育つた。彼らはオカの人々が築いた壁から海面までの間に自生する木をきり、粗末な小屋を建てたり、原初の先祖達がやつたように、自然の洞窟をみつけて棲んでいる。

翔たちの村はそれより運がよかつた。

翔の祖父が貴主をつとめる清水寺とその周辺の神社や寺の建物を共同で使っているのだ。といつても、それらの建物とてあちこちにほこりびがみられ、隙間風は入るし雨漏りもする。

しかしきちんと修繕できる匠たちなどいるわけもなく、第一道具がない。だから手先の器用な人たちが手作業でなんとか住める状

態に修繕していのだった。

オカで生まれ育ち、「そと」に出たことなどなく、ましてや寺院などの木の大建造物やそれらが木々、山々に抱かれているところなど、色あせた写真や映像でしか観たことがなかつた守は、海洋調査官としてここに赴任してきたその日。集落につくなり無邪気にこう言ひ放つた。

「すういな。自然に囲まれて暮らしているんだ。贅沢ですね」

出迎えの村長たちとは離れて立つていた翔はこの蘭入者を、凍るよつな目でみすえていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2760z/>

翔の物語 ~未来を生きるぼくら~

2011年12月20日18時48分発行